

論 説

教師雑感

私が求める教師像と授業心得について

元福岡県立福岡工業高等学校長 藤永 繁

1. はじめに

工業高校に37年間、専門学校に8年間勤務した。45年に亘る教職生活を送りながら、たいした成果も残し得ず、私は一体何をしてきたのか、省みて天地に慙じ、人に愧じることばかりである。

しかし、私のような者でも、40年余も教育の仕事をしていると、いろいろな生徒と接し、苦楽もあり勉強もさせてもらい、また先輩や同僚教師から、多くの指導助言と鞭撻を頂き、自分なりに成長し、信念のようなものが、できてきたように思う。

そして「教育は人なり」は、まさに名言であると感じている。

「教育は、優れた人格と熱意と気魄溢れる、実践的な教師によってのみ、その成果をあげることができるものである。」ことを知った。

そこで私は、後に続く教師達に、次のことを贈りたい。

2. 私が描く学校像

私は、4つの工業高校の校長を経験させてもらった。初任の学校は大変経営の難しい学校で

あったが、これをいかに正常化するか、腐心したものである。

「校長が変わると教師が変わる。」

「教師が変わると生徒が変わる。」

「生徒が変わると、学校が変わる。」

との信念のもとに、学校経営の改善、改革に努めたものである。その時描いた「よい学校像」が次の5つである。

- (1) 生徒が目的意識を持って生き生きとして、勉強や運動に励む学校
- (2) 生徒の希望する進路が達成される学校
- (3) 地域社会や企業から、信頼される学校
- (4) 教職員が研修に励み、日々成長している学校
- (5) 生徒を自然に教化する、校風・雰囲気をもつ学校

ペスタロッチは「進みつつある教師のみ、子どもを教える権利あり。」と言ったが、私は「進みつつある教師が、よい学校をつくる。」と言いたい。

3. よき教師となるために

教師が生徒から敬愛され、信頼されるために

は、自分の言行に一貫性をもたせるフレームをもつことが大切である。

(1) 自分の教育哲学、生活信条をもつこと

教育は理念であり、信念である。しっかりした教育理念、教育信念をもたなければ、よい教育はできない。

信念なき教育は、生きた力とはならず、人を陶冶し、感化することなどできない。

確固たる信念と、自信をもつことが大切である。

(2) よきライバルをもつこと

一般に人間は弱いもので、1人でコツコツ頑張るには限界がある。ライバルの存在があると、個人の力は、120%にも130%にも発揮されるものである。切磋琢磨する存在が必要である。

「よい仕事をするには、よき友をもて。

よき友とは、よきライバルのこと。」

(3) よきメンターをもつこと

よい授業をする人、生徒指導の上手な人が、身近にいるはずである。その人を師として、指導助言を受けたり、その人の言行を観察して、それを模倣しながら、自分のものにしていく努力が重要である。

「恥を捨て、人にももの問ひ習うべし。

これぞ上手の基なりけり。」

(4) 自己啓発に励むこと

自己啓発とは、自分自身の考えと能力と努力で、自分の未来を切り開いていくこと。

自己啓発は、どんな人にも必要なことであるが、特に人の上に立つ人、人の教育に当る人には重要である。

教師は専門職である。優れた授業をする人である。教師は、常に自己啓発に励み、優れた授業ができるように、努力する義務と責任がある。

(5) 生徒の規範・師表となること

生徒の資質・能力が環境から受ける影響は極めて大きい。

「生徒にとって最大の教育環境は、教師そのものである。」 (ロナルド・エドモンズ)

教師は、生徒にとって、社会的環境の一部であり、文化的環境の一部を構成しており、生徒に直接・間接に、大きな影響を与えているのである。

「教師は、後姿で教える。」と言われるように、教師が黙って実践している行為が、そのまま生徒の模範であり、手本であるような生活態度が求められているのである。常日頃、好ましくない生活態度の教師が、生徒に行為の規範を説いても、教育効果はあがらない。生徒は純真であるだけに、本能的に教師の本質を見抜く力を持っているもの。だから、口先だけで、立派なことを教えても、駄目である。生徒は、教師の知識だけでなく、教師その人を吸収していくのである。

4. 私が求める教師像

「教師は、ロウソクのようなもの。自らを燃やし尽くして、生徒を啓発する。」

(伊、作家 ルーファニー)

「教師は、太陽であれ。」と私は言いたい。

太陽は自己燃焼して強大なエネルギーを出し、自然界に存在する万物に光と熱を与え、生きる力を与えている。そのエネルギーは、万物に対して公平平等である。

教師は太陽のように、生徒に対して、公平平等に生きる力を与える存在であってほしい。

(1) 教科指導で勝負する教師たれ

教師の仕事は多岐に亘るが、教科指導が最も大切である。教科指導に弱い教師は、生徒から信頼されない。

専門分野については、徹底的に研究し、その教科指導の権威になるくらいの気持ちで、努力することが大切である。

教えるべき事項や問題を自分なりに十分研究し、マスターしていなければ、よい授業はできない。そうでなければ、借り物の知識で一応説明することはできても、生徒に納得のいく、興味関心を喚起するような授業にすることは、極めて難しい。

教材研究に励み、指導方法の工夫改善に努め、魅力ある授業づくりに全力を傾注する教師であってほしいものである。

「凡庸な教師は、ただしゃべる。

よい教師は、説明する。

秀れた教師は、自らやってみせる。

そして偉大な教師は、心に火をつける。」

(ウィリアム・アーサー・ワード)

(2) 実践躬行の教師たれ

教師が生徒に、どんなに立派なことを言って聞かせても、教師自身がしなければ、今日の生徒はついてこない。教師自らの進もうとする意欲と実践こそが、生徒を動かす原動力である。

昔から言われているように、「させようとしてもできないが、教師がすれば生徒もするようになる。」

「何よりもまず教育に必要なものは、絶えざる自己鍛錬である。真の教育は、自分に対して成し遂げた自己教育の尺度によって、生きている。」 (独、シュプランガー)

このことは、教育にとって大切なことは、教師自身の実践躬行であり、教師が学ぶことによって生徒も学ぶ、教師が燃えることによって、生徒も燃えることを教えてくれている。

教師自ら身をもって実践することが、教育の根本である。

「師厳にして、道尊し。」 (『礼記』)

人を教え導く者は、己に厳しくして、手本と

なるように行動しなければならない。

(3) 生徒を叱れる教師たれ

今日の学校教育には、次のような特色があると言われている。

① 強制しない。 大目に見る教育

② 叱らない。 罰しない教育

そのためか、誉める教師ばかりで、叱る教師が少なくなり、学校教育から規律と秩序が消失しつつあるように感じられる。

「個人の尊重、個性重視」の陰に隠れて、生徒への妥協が優先し、叱ることのできる教師が減ってきているのではないか。

教育において、誉めることは大切である。

誉めることは、生徒の「勇気付け」や「やる気」を起こす力になることは、言うまでもない。

しかし、「誉めることと同じくらい叱れ。」ということも、教育においては、必要なことである。叱ることがなければ、誉めることが生きてこないのである。

叱ることの意味は、何をどう改めるかを教えることであり、不服従を叱ることではない。

「教師は、叱る権利と教える義務を、正しく行わなければ、教師の務めは果たせない。」

(夏目漱石)

(4) 生徒の個性を伸ばす教師たれ

教師は、一人ひとりの生徒の個性・特徴を見つけ出して、よい面は伸ばし、悪い点は抑制してやるところに、その存在の意味がある。一人ひとりの生徒の個性や特徴を見つけ出すことは、決して容易なことではない。

生徒より一段と高い所から見ると、生徒の目の高さから見ると、生徒の行動を多角的に見ることが重要である。

生徒の特徴・長所をさまざまな角度から見つけ出し、その生徒の一番輝いているところを、具体的に誉めてやることである。

「生徒の個性を開発するものは、生徒の個性ではなく、教師の個性である。」(折口信夫)
教師は、自分の個性を発揮した授業をすることによって、生徒の個性を引き出すのである。教師は創意工夫をこらした、個性を発揮した授業で生徒の才能を見つけ出し、それを伸ばしてやることに、情熱を注ぐのでなければ、教師の資格はない。

「われ、まさに人の長所を見るべし。
人の短所を見るべからず。」 (佐藤一斉)

(5) 生徒から尊敬される教師たれ

教師は、日常接する生徒から、慕われ尊敬され、信頼される存在であることが、何よりも必要なことである。

「人間というものは、第一に自分の好きな人、第二に尊敬を抱いている人からのみ、文化や伝統を受け継げるよう、プログラミングされている。」 (コンラート・ローレンツ)
人間というのは、生まれながらにして、好きな人、尊敬する人の言うことに従うようにできている。

だから教師は、生徒から「好かれ、尊敬される存在」でなければ、教師の職務が果たせないのである。

それでは生徒から「好かれ」かつ「尊敬される」には、どうしたらよいか。

まず好かれるには、「生徒のことを思いやること。」「愛のある関係をもつこと。」

生徒の幸せのために、自分のできるすべての努力を惜まない。いわば、教育愛をもって、生徒に接することである。

深い教育愛は、必ず生徒の心を動かし、生徒からの限りない信頼を生み出すものと思う。

「尊敬される」には、信念をもって、何事に対しても努力する、汗を流すことである。

一生懸命、全力投球することだと思う。

そういう姿に感動し、心を打たれ、尊敬の念

を抱くのではないか。

生徒から好かれ尊敬されれば、学業指導も生徒指導も容易にでき、成果も大きくなる。

要するに、「好かれる、尊敬される。」ことは、教師の人間性の根本的要素である。

5. 授業心得

「教師は教える。しかし、教えること以上の何物かを、生徒に与えている。例えば、数学の教師は、数学を教えながら数学以外の何物かを与えている。そして教えていること以外の何物かが重要なのである。」

(仏、ギューストン)

私達教師は、口で教えていると同時に、行為で教えていること十分理解して、授業に当るべきである。

(1) 生徒の熱い期待を忘るべからず

「生徒は、教師に魅力ある授業を期待している。」魅力ある授業とは、教師が一方的に与える一方通行の授業ではなく、コミュニケーションを通して、教師と生徒が共に創りあげる、全員参加の授業である。

「人間は考える葦である」と共に、「感じる葦でもある」。授業の中で生徒に、満足感を感じさせ、感動させることが必要なのである。

そのためには、

教科書の内容を毎年同じように、何の変化も工夫もなく、繰り返して教えて、それでよしとしているような教師では、絶対に生徒に感動を与えることはできない。

専門知識は、教師にとって必須条件であるが、専門分野に関して自惚れをもつと、教え方を工夫しようとせず、紋切り型の単なる知識の披瀝、一方的な伝達に終始してしまうから注意すべきである。

授業において、感動的な体験を味あわせ、興

味関心を持続させ得るかどうかは、教師の努力と熱意にかかっている。

教授法を創意工夫し、自信をもって、迫力ある授業をして、生徒の期待に添えてほしい。自信がないと、授業に粘りも迫力も出てこない、厚みのないうすっぺらな授業になる。

魅力ある授業づくりのポイントは、

- ① 結果よりも過程を大切にする。
- ② 一人ひとりの目標を設定する。
- ③ ゆとりある、考える授業をする。
- ④ 生徒のテンポに合わせる

(2) 授業時間を端折るべからず

「授業は、チャイムからチャイムまで。」

授業の始業チャイムで教室に入り、終業のチャイムで教室を出る。この平凡で当り前のことを継続すれば、生徒の学習意欲は刺激される。それは、教師が授業を大事にしている意思が、生徒に伝わるからである。

始業のチャイムが鳴っても、なかなか教室に行かない教師は、自分の授業を大事にしていないうし、生徒を大事に考えていない。

そんな教師の授業を、生徒が心を開いて、聞くはずがない。

生徒の時間を大切にすることが、生徒を大事にすることである。

授業に遅れる理由に、教材プリントを準備していたとか、生徒指導をしていたとか言う人がいる。

教材プリントの準備や欠席者への対応・生徒指導等に取り組むことは大切である。

しかしそのために、教師が授業に遅れてよいとはいえない。

教師が遅刻したために、クラス40人の生徒が、5分間待たされたとしたらどうなるか。生徒1人は5分間でも、全体としては、約3時間余の損失になるのである。

即ち、教師が授業に遅れることは、生徒の時間を無駄にさせるのみならず、学習の雰囲気や学習意欲をこわす恐れがある。

教室の雰囲気づくり、授業時間の管理は教師の責任である。教師が授業時間に遅れながら、生徒に遅刻しないように、声を大にして説いても、教師の行動が伴わない限り効果はない。

自分の授業を大事にし、進捗のことを考え、教室で待っている生徒のことを思うなら、このことを守り続ける教師であってほしい。

(3) 無気力授業をするべからず

「生徒のやる気を育てるのは、教師のやる気である。」生徒にいくら「やる気をだせ、意欲をだせ」と言っても、指導する教師自身にやる気がなくては、生徒のやる気は育たない。教師が授業に「元気で気持ちよく臨む」と、「いやいやの気持ちで臨む」とでは、教育効果に大きな差が生じてくる。

生徒の学習意欲を引き出し、それを高めるために、教師の迫力ある姿勢・態度が大切である。

「教師が力を抜いて授業をすると、生徒はだれる。教科書ばかり見ながら授業すると、生徒はだれる。」

毎日のことで、その日その日の体調もあると思うが、生徒の前に立った時は、熱意と気力の溢れる授業を展開しなければならない。

(4) 教材研究を怠るべからず

「授業の成否は、教材研究の質と量で決まる。」授業準備、教材研究を行うのは、教師が自分の授業に自信がないから行うということではない。教師は、どんなにベテランになっても、授業の準備をするのは、生徒を大事に考えているからである。

確かな、魅力ある授業づくりを目指して、「よい授業をしたい。このことを確実に生徒に伝えたい。」という情熱であり、生徒への愛情である。

教師の営みにとって大切なことは、一人ひとりの生徒に対して、どのような願いをもち、どのような配慮・計画・準備をもって、対応しているかということである。

1つの教材を教えるについても、どのような教材観に立ち、どう構成し、どのような手順方法で教えたらいいか。また一人ひとりの生徒の能力、適正を考えて、どのように与えていったらよいか、創意工夫、研究して授業に臨むことが大切である。

(5) 私語・居眠りを許すべからず

「私語・居眠りは、学習の雰囲気をこわす。」

授業中、私語雑談や居眠りをする生徒がある場合、教師は生徒を責めるのではなく、原因は何かと考える、原因を追求する気持ちをもつことが必要である。

生徒が「熱中できる授業」「わかりやすい授業」「生徒を引きつける授業」の開発に、努めるという気持ちをもつことが重要である。

授業中、姿勢や態度が悪い、私語・居眠りをする生徒がいたら、放置しないで注意することが大切である。それを見過ごすことは、教える義務の放棄であり、愛情の欠如であると考えべきである。

私語する生徒がいた場合は、教師が話をしている時は、それを静かに傾聴するのが生徒の務めであり、人間としてのマナーであることをわからせていくこと。

授業中私語することは、他の生徒への迷惑行為であり、授業の雰囲気をこわす行為であることを教えること。

居眠りする生徒は、私語する生徒に比べると、他の生徒への迷惑になる度合いは小さいし、自分から自分の授業を受ける権利を放棄しているのだからと、放置してはならない。

放置することは、教える義務の放棄になり、生徒に対する愛情不足であると自覚すべきであ

る。

教師は、生徒の望んでいる教育を適切に与え、実力をつけさせて、社会に役立つ人材として、社会へ送り出すことが使命である。

そのために、渾身の力を込めて、教育に当たってほしい。

「今日、生徒に満足を与えずして、明日の教育はない。」

6. おわりに

「よいことばの一言は、多くの本の一冊にまさる。」 (仏、ルナール)

私は、よいことばに出会うと、すぐに手帳にメモする習癖がある。

今回の文章は、そのメモのことばを自分なりに解釈し、理屈づけして、現役時代に職員会議や研修会等で話していたものである。

多くの諸賢のことばを引用させて頂いているが、どこで出会ったかさだかだけでなく、参考文献としてあげられるものが少ない。ご容赦頂きたい。

参考文献

「現場の校長学」佐々木益男著、高陵社書店

※本稿で紹介したことばは私のメモに基づくもので不正確な点もあることをご了承いただきたい。